# 日本とタイのかけはしに

小　六

私は、六才のときタイから日本に来ました。はじめは日本語がすらすらと話せなかったけれど、父や母が助けてくれて、今は話せるようになりました。

私は、日本で生まれたけれど、母の母国であるタイに行きました。だから私は、あまり日本のことがわかりませんでした。

小学校に入ってすぐのころは、言葉の意味がわからなかったので、何をしていいのかもわかりませんでした。そんなときは、いつも先生や家族が助けてくれました。だんだん学校生活に慣れてくると、友達も増えました。言葉も上手になっていきました。

四年生の時、同じクラスのA君が、

「タイ語で『こんにちは』は、どう言うの。」

と話しかけて来ました。私は、

「サワディーだよ。」

と答えました。すると、A君は、

「すごいなぁ。タイ語を知っているんだね。」

と言いました。

こんなふうに、だんだんとクラスの人が、タイのことについて興味をもってくれるようになりました。

五年生になって、外国語の授業が始まったとき、私は、友達のBちゃんに聞きました。

「ねぇ、大人になったら、どこの国に行きたいの。」

すると、Bちゃんは、

「タイの国だよ。あなたとお姉さんも行ったことがあるから。」
と言いました。Bちゃんが、こう続けました。
「私が行くときには、あなたとお姉さんも来てね。ガイドをしてもらいながら、タイの国を回りたいからね。」
私は、
「はい。」
と元気いっぱい答えました。とてもうれしかったです。
六年生になると、C君が言いました。
「タイ語を書いてみて。」
私は、
「いいよ。」
と言って書くと、それを見たC君は、
「すごい。大学に行って外国の勉強をしたら、たぶんあなたは、いい成績をとれそうだね。」
と言ってくれました。私は、そうなったらいいな、いっぱい外国のことを学びたいなと思いました。
私は、みんな、外国のことを知りたいと思っているんだな。外国のことをきらいと思わないで、私といっしょに楽しそうに言葉を勉強してくれてうれしいなと思いました。
私は、大人になったら、父の生まれた日本と母の生まれたタイの両方の国でかつやくできるような仕事をしたいと思っています。